



# ひらほく新聞

「ひらほく」で検索!  
★ホームページ ひらほくランド★  
http://www.hirahoku.com/  
★ブログ ひらほく通信★  
http://ameblo.jp/hirahoku/

発行所 読売センター平塚北部 (ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807



2014年、平成26年、  
明けましておめでとうございます。  
午年、さらに一步踏み出して、より深く  
つながる、馬が合うご縁づくりを目指し、  
常に感謝を忘れず、熱く駆けて、お互い  
皆で馬くゆく年にしていきましょう。  
たくさんの皆様のご縁に感謝いたします。  
本年も何卒よろしく願いいたします。

## 子どもたちに「いのちの授業」 元中学校教頭、三本杉祐輝さん

筆文字ご縁つながりの方から、年末に行われた、とても素晴らしい三本杉先生の講演会動画のご紹介がありました。

|||||

福島県双葉町の元中学教頭、三本杉祐輝さんは、血液のがん「悪性リンパ腫」で闘病中。がんなって初めてわかった「いのち」の大切さ。闘病のため教師は辞めたが、教壇に立つことはやめられなかった。各地で、子どもたちに「いのちの授業」を続けた。医師から「余命宣告」を受けた時もあったが、それを何とか乗り越けると次に待っていたのは、震災と原発事故。原発事故で故郷を追われても、避難先で、いのちの授業は、続けられている。いのちの授業で発せられることば。ことばで編まれた詩や詞は、詩集となり、また、歌となり、広く届けられている。

※上記ブログにて紹介します※

12月9日福島市立西根中学校にて開かれた講演会は、三本杉先生が「優しさのたね」という演題で生徒や先生方、保護者の方にお話してくださいました。とても素晴らしい内容でしたので、重要点を抜粋してご紹介いたします。

『いのち』  
毎日が当たり前ではなく、有り難いことであり、奇跡の連続であるということ。『命』とは、自分だけの命ではなく、繋がっている命であり、頂いたものを磨くのは自分しかない。自分の人生は自分で切り開く。

『出会い』

出会うのポイントは、視野を広げ、ものの見方を広げること。過去を悔やんでも、未来を不安がっても何にもならない。今を輝かせて生きることが重要。そのために大切なことは…

限りある中学校時代は大事な財産。人生の幹をしっかりと育てること。日常や行事を大切にしたい。出の多い幹を創ってほしい。その幹を育てるには、【3C】  
チェンジ・チャレンジ・チャンス。  
今から自分を変え(チェンジ)、挑戦し(チャレンジ)、それをチャンスと捉え行動していく。何回挫けても、折れても構わないから、何度でも立ち上がれ。失敗を恐れず、そういう気持ちを持って今を輝かせること。

①様々なことに好奇心をもつ  
②いくつになっても素直である  
③前向きに生きる

『時間』

3年生を迎える受験は、まさに自分の将来を切り開くためのもの。いままで育てていただいた、お家の方、先生方への感謝の気持ちはすくく大事。それは、一つの区切りだから。卒業とは終わりではなく、そこから巣立ってゆく大切な旅立ちの儀式。「ありがとう」という言葉をしっかりと出せるように。

『感謝』

昨年未発表された神奈川新聞社主催 2013年第5回かながわ【新聞感想文コンクール】の『小学5年生の部 最優秀賞』、鈴木すみれさんの作品をご紹介します。読売新聞7月26日付の「電車押し乗客らが女性救出／海外で絶賛報道」の記事を読んだ素晴らしい感想文です。誰かのために、目の前の困っている人のために動く力、まさに日本人の大切にしてきた思いやりの心、生き方を感じました。鈴木さんの言われるように、最初に動く人でありたいものです。

### 小学5年生の部 最優秀賞

#### 最初に動くその誰か

湘南白百合学園小学校 鈴木 すみれ

JR南浦和駅で、七月二十二日、ホームと車両の間に挟まれた女性客を、乗客と駅員が救出したという記事が目にとまりました。この記事は、海外でも報道され、各国で絶賛されたという。

自分達の国で同じ事故が起こっても、乗客は眺めるだけで何もしないだろう。

—日本だけでおこりうること。

女性が転落したことに気づいた人はすぐに「列車非常停止ボタン」を押した。駅員が駆けつけ、車両を押したところ、周囲の人達も一緒に押し始めた。ラッシュ時にもかかわらず、車内の人達は自主的に、ホームに降りた。

もし、わたしが事故の現場に居合わせていたら、どうしただろう。「せーの！」

というかけ声が聞こえたなら、隣の人が押し始めたなら、わたしも同じことをするかもしれない。でも、「最初に動く人」になれるのか、その自信はない。瞬時に判断して、行動に移す人がいたから、それが良いことだと察して、皆が力を合わせたから、女性を救出することができたのだ。

ロイヤルベビー誕生に湧く英各紙では、この救出劇を「英雄的」と評したが、これは、一般的なヒーローという意味ではないと、わたしは思っている。東日本大震災で極限状態におかれた被災地で、人々が整然と列を作っていたことが世界を驚かせたように、日本人の、ピンチでも諦めない、かえって一致団結する姿に、外国人の人達は賛辞を送ってくれたのではないだろうか。

そして、祖母の話も思い出した。祖母は学生の頃、超満員の電車から降りようとして、お箸箱を車内に落とすことに気がついた。

「えっ? 何? 箸箱落としたってよ〜!」

大声をあげてくれた男性から次々と伝言ゲームのように伝わって、ついに、「箸箱、あったぞ〜!」。

電車が停まっていた僅か二分の間に、バトンのように手から手へ渡り、そのお箸箱は祖母の手元へ戻ってきたのである。張り上げてくれた声を祖母は今でも覚えているという。

同じ電車で通学しているわたしは、駅での言い争いを見たことがあるし、人身事故後の大混乱では、イライラモードが最高点に達することもよく知っている。

しかし、誰かのために力になりたいという気持ちを持てば、それが周りの人に伝わって、計りしれないパワーを生み出すのだ。最初に動くその誰かに、わたしはなりたいたい。

## 【笑いのある子育てに共感】

読売新聞社の企画するインターネットの掲示板「発言小町」で、4人の息子さんを持つ母親からの投稿(トピック)が、2013年、最もに残った話題として「発言小町大賞2013」の「ベストトピ賞」に輝き、発表がありました。投稿主が子どもを笑わせるよう心がけたところ、怒ってばかりいた毎日が一転したという投稿に、心温まる思いをした人も多かったようです。以下、昨年末12月14日の本紙記事より。

投稿主には3～6歳の4人の息子がいる。3歳児は双子で、重い病気と知的障害がある。また、夫は仕事で家を不在にしがち。イライラすることも多かったという。

そんな時、テレビで「子育て中は、子どもをいかに笑わせるかを考えていた。お風呂に入る前にお尻を壁から突き出して振ったりした」というタレント、関根勤さんの話を聞いた。投稿主も早速、お尻を突き出すなどしてみると、子ども全員が笑顔になった。

それ以降、子どもをくすぐったり、変な顔で歌ったりと、子どもをどう笑わせるかを考えながら生活するように。「子どものいたずらも減り、毎日幸せで楽しくなりました」という。自身も笑顔になった。

投稿主には、子育て中の母親を中心にエールが送られ、「我が家でも取り入れたい」という反響も相次いだ。

6歳の男の子を持つシングルマザーは「息子に冷たい言葉を言ってしまうなど、イライラしてばかり。関根さんの言葉、目からウロコです」。

発達障害の子どもがいるという人は「大切なことを教えてくれて、ありがとう」と感動した様子だった。アニメのキャラクターの声まねなど、子どもを笑わせる方法を披露する人もいた。

笑いのマジックは、子育て以外でも効果があるようだ。母親を在宅介護しているという女性は、「母の笑顔が見たくて母を笑わせることばかりやっていたら、つらかった毎日が楽しくなった」。

育児関係者の多くは、子育てにおける笑顔の大切さを指摘する。

「笑いは薬のようなもの。子育てを豊かにもすると思う」と話すのは、吉本興業がはじめたプロジェクト「パパパーク」のリーダー、佐藤詳悟さんだ。

同プロジェクトは「パパ芸人」を集め、子育て番組の出演、雑誌連載などを行っている。例えば、お笑いコンビ、ペナルティのワッキーさんは、動物の物まねをしたり、耳を引っ張って変な顔をしたりといった、赤ちゃんを笑わせるための動画を作った。

元保育士の「こどもコンサルタント」、原坂一郎さんは「子どもは、自分を笑顔にしてくれる人を好きになって信頼し、聞く耳を持つようになります」と、その効果を説く。

忙しくて子どもを笑わせる余裕がない人もいるだろうが、「子どもに指示する時、ちょっと表情に気を付けるだけでも効果があります」とアドバイスしている。

いかがですか。笑いが、自然治癒力・免疫力の強化など、医学的にもその効果が多く報告されています。今年も「大笑い」でスタートしましょう！

## 【永遠の0】

『海賊とよばれた男』が、2013年の本屋大賞に選ばれた百田尚樹さんの作家デビュー作であり、ベストセラーとなった『永遠の0』が、映画化され、昨年末12月21日から公開されています。

物語は、終戦から60年目の夏、司法試験に落ち続け、人生の目標を失いかけていた健太郎が、特攻隊員として戦死した祖父の生涯を調べ始めるところから始まります。2006年の作品なのですが、話題となった昨年、自分は終戦記念日直前に読みました。2日間で読んだのですが、その語りもうまさに一気に引き込まれました。

実は、自分の祖父は、父が小学生の時に戦死しています。読み進めるうちにどうしても靖国神社に行きたくなりました。最後のクライマックス、四分の一ほどを電車の中で泣きながら読み終えて、夕刻閉門一時間前に参ることができました。

そして、待ちに待った映画公開。満を持して？初日に観ることでできました。リアリティあふれる空戦の模様など、想像以上の素晴らしい出来映えに感動しきり、そして、たくさんたくさん涙しました。

原作にない場面があり、思いを伝

えるべく、とても意味深く作られています。大切な家族のために、必ず生きて帰るという約束。そのことで仲間から「臆病者」と呼ばれた、孤高の天才パイロットは、なぜ、最後に特攻を、死を選んだのか…。

これを「運命」といいいいのか。衝撃の結末。

「あと10年もすれば、我々戦争経験者は、皆いなくなるだろう。その前に伝えることができよかったです…」というセリフがありました。ある意味反戦小説ですが、まさに作者、百田さんが伝えたかったことであり、私たちの世代が、次の世代に語りつないでいかなければならない大切なメッセージがたくさん表現されています。

わずか70年前のことですが、その壮絶な時代に亡くなっていった多くの命、生き残って葛藤の人生を歩んだ人たちの思い。私たちは、この与えられた命をいかに使うべきか。

書籍にて、劇場にて、ぜひ、それぞれに感じ取ってもらいたいと思います。



## ☆感涙警報☆ 【メリーゴーランド】

結婚を控えた娘に・・・

いよいよ来月、結婚するんやね。

おめでとう。

ジューン・ブライドに憧れていたはずなのに、きみは結局、お母さんの旅立った8月を式の日を選びました。

あなたの母親であり、私の妻であった、我々の最愛の女性は、ある、小さな記事として新聞にも掲載された交通事故により、きみがまだ6歳の時に亡くなりました。

突然すぎて、悲しみ抜いて、途方に暮れて、精神的に参ってしまった私は、死のうとしたんです。バカなことに、きみを連れてお母さんを追いかけてしようとした。

その日、最後の思い出にと、家族でよく出かけた遊園地に2人で行きました。君は嬉しそうに、はしゃぎ回った。いつも家族で乗ったメリーゴーランドにひとりで乗るきみを、私は精いっぱい笑顔を作って、だけど力なく手を振って、きみが「お父さん」と呼ぶ声に必死で答えていました。

とにかくきみは楽しそうで、これが最後の遊園地になることも知らずに、いや、今日が最後の日であることも知らずに、元気いっばいに走っては、乗り物をハシゴしてた。

きみが楽しげであればあるほど心は痛んで、でも、心が痛めば傷むほど、必死で笑顔を作るようにしました。

やがて急流すべりを乗り終わって、こちらに駆けつけてきたきみは、満足げな表情で見上げつつ、私と手をつないで、ニコニコしながらこう言いました。

「もういいよ、お父さん。

もう、お母さんのところに行こ」

きみは気づいていたんやね。

きみを抱いたまま、ムリヤリ、父親の私がこの世を去ろうとしていたことを、なぜか知っていたんやね。

この言葉で、私はハッと目が覚めました。

私はこんなことを言った。

「あほ！お母さんに怒られるぞ、ミス！いつか、お母さんがゴハン作って待ってるのに、迎えに来てくれたオマエと駅前の焼鳥屋に寄り道した時みたいに、『そんな勝手なことするんやったら、二人で出て行きなさい！』って、お母さんスネるぞ！スネたらひつこいぞ〜！」

こう言うときみは…、お葬式の日以来、お母さんのことでは全く泣かなかったミスは、セキを切ったように大きな声で泣きだしたね。

24年前のあの日のことを、きみは憶えていないと言います。でも、きみに子供が、そう、私とお母さんにとっての孫ができて成長したら、あの遊園地にみんなで行こう。お母さんの分も入場券をちゃんと買って、みんなでメリーゴーランドに乗ろう。そしてみんな、思いっきり笑おな。

ミスは、本当におめでとう。

(滋賀県・60代男性)

出典『なみだのラブレター』(橋本昌人) ヨシモトブックス



## ☆心にサプリ☆ 【母の顔の傷】

私は母の顔がすごく嫌いでした。なぜなら大きなやけどの跡があるからです。「よそのお母さんはあんなに綺麗なのに何で私のお母さんは…」とか、「何でこの人が母親なんだろう」とさえ思ったことがありました。

そんなある日のこと。その日の四時間目に、私はあることに気づきました。夕べ徹夜で仕上げた家庭科の課題が手元に無いのです。どうやら家に置いてきてしまったようです。あたふたして勉強も手につきません。

家庭科の授業は五時間目。私は昼休みに自宅まで取りに帰る事を決めました。四時間目も終わり帰る準備をしていたところ、クラスメートが、「めぐみ～、めぐみ～、お母さん来てるよ、」と言いました。私は、はっとしました。急いで廊下に出てみると、なんと、母が忘れた課題を学校まで届けに来ていたのです。

「なんで学校にきてるのよ！取りに帰ろうと思ってたのに！」と息を立てて問い詰めると、「でも、めぐみちゃん夕べ頑張ってやってたから…」と言いました。私は、「おばけみたいな顔して学校来ないでよ、バカ！」と言って、母から課題をひったくるように取り上げると、すたすと教室に入っていました。自分の母親があんな顔をしていることを友人達に知られてしまったことで、私は顔から火が出る思いでした。

その日の夕飯後のこと。私は父親に呼ばれました。屋間のことで怒られるのだろうなと思いました。

すると父親は予想に反してこんな話をはじめました。

「お前がまだ生まれて数ヶ月の頃隣の家で火事があった。その火が燃え広がって、うちの家まで火事になったことがあったんだよ。そのときに二階で寝ていたお前を助けようと、母さんが煙に巻かれながらも火の中に飛び込んでいったときに、顔に火傷を負ってしまったんだよ。今、お前の顔が綺麗なのは、母さんが火の中に飛び込んでいったお前を助けたからだよ。」

私はそんなことは、はじめて聞きました。そういえば今まで火傷の理由を母から聞いても、あやふやな答えしか返ってきたことはありませんでした。

「なんで今まで黙ってたの？」私は涙ながらに母親に聞くと、「めぐみちゃんが気にすると思ってずっと黙ってようと思ってたんだけど…」と言いました。

私は母への感謝の気持ちと、今まで自分が母親に取ってきた態度への後悔の念とで、胸が張り裂けそうになり、「お母さん」と言って母の膝の上でずっと泣いていました。

今では自分の母の顔のことが誇りにさえ思えるようになりました。家族を、私を守ってくれた母のこの顔の傷のことを…。 (出典FB涙が止まらない)